

本を選ぶ

NO.395 2018年(平成30年)4月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL:048-432-3726

- <ろん・ぼわん>小麦を挽く
- 『公益財団法人 東洋文庫』を訪ねて
- 本から発せられるもの
- 鎌倉散歩〜ゆかりの文学を訪ねて
- 選書の法則:S.R. ランガナタンからの187のメッセージ (13)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

小麦を挽く

しっかりした鋳物の鉄鍋でパンを焼くと、意外にもうまくできる。しかもほとんど捏ねないで水分を多めに加えた生地をこしらえて、そのまま一晩かけて発酵させる。二次発酵後に蓋をしたまま焼き続け、最後に蓋を開けて焼くと、表面がかりっと焼ける。クラムもクラストも申し分ない。原理としてはダッチオーブンと同じだ。

全粒粉を加えて試したところ思わしくなかった。ふすまを含むせいか、膨らみも食感も今ひとつだった。難しい。また、粉は挽き立てのものがいいようだ。馴染みのパン屋さんで使っている粉を分けてもらっている。いずれ酵母も自家製で試してみたい。味わいが増すと期待している。

以前コペンハーゲンのデパートの食品売り場で玄麦を見かけて感心したが、でも挽くのはどうするのか一瞬間に思ったものの、すぐ脇に製粉用のミルが備えてあり、驚いた。さすがパン王国の彼の地では自宅でパンを焼く人が多いのだろうか。これならきっと酵母もできる。イーストではなく、小麦粉そのものを発酵させてパンを焼く、これぞ理想ではないか。

思い出したのが、大草原の小さな家シリーズの1冊『長い冬』（ローラ・インガルス・ワイルダー

作／岩波少年文庫／2000年）のパンを焼くくだりだ。ローラたち一家が、まだ10月だというのに突如襲った寒波をしのぐ辛く長い冬の物語。孤立した町で、一家も連日の吹雪に閉じ込められてしまう。大切な石炭を節約するために、たくましい父さんは干し草を燃やして燃料にする工夫をすれば、賢い母さんは機械用のグリースとボタンを使ってランプを作り出す。町には粉挽き小屋がないので小麦粉はもう手に入らない。種小麦を小さなコーヒーのミルで挽き、パンを焼く。ローラとメアリ、小さなキャリーは交代で、かじかむ手で健気にも小麦を挽き続ける。母さんは挽き立ての小麦粉にぬるま湯を加えてパン種を作る。サワー・ドウだ。

古いブジョーの木製コーヒーミルを引っ張り出して、よくよく眺めてみた。ちんまりとした抽出の付いたミルで小麦を挽くのは現実的ではない。所詮は家庭用だし、せいぜい一度に30グラム程度のコーヒーを挽くのがやっとだ。だから子どもたちが交代で一日中挽き続けてもたかが知れている。小麦粉として細かく挽くのも難儀だっただろう。物語では黒パンと表現されているが、要するにふすまの混じった素朴なパンだったに違いない。

南仏の小さな町ロデヴ特産のパンは独特の風味と食感で知られている。地元ではパン・パイヤスと呼ぶそうだが、日本でもロデヴという名称で焼くパン屋があって、時々食べたくなる。捏ねない生地を鉄鍋でじっくり焼いたパンは、このロデヴのような大きな気泡はないけれど、同じようにもっちりとした食感で粉の薫りを感じる。(埜村 太郎)

東洋学研究の専門図書館『公益財団法人 東洋文庫』を訪ねて

神原 和子

厳しい寒さだった冬が嘘のように急に春めいた3月のある日、40数年ぶりに東洋文庫を訪れた。その時は大学の卒論の資料を閲覧に行ったのだが、樹木の生い茂る敷地の奥まった所にある暗い建物だった印象がある。厳粛な雰囲気は今でも覚えていて、今回も多少敷居が高かったのだが、過去の印象はすぐに払拭された。建物は近代的なビルに建て替えられていた。中の様子を書く前に東洋文庫について簡単に紹介しよう。

1 東洋文庫は—

東洋文庫は、1924年に三菱第3代当主岩崎久彌氏により設立された日本で最初の、日本最大の東洋学の研究図書館である。岩崎氏は、自身の蒐集した蔵書をはじめ、1917年に英タイムズ記者だったモリソン氏のモリソン文庫24,000冊を購入し、土地・建物も寄贈し開設。その後も蔵書を購入・寄贈で充実させ、1940年頃には25万冊を超える規模になった。

戦後は財閥解体命令等で財政危機となるが、1948年に国立国会図書館の支部となり閲覧を再開。アメリカの財団の大口寄付金や文部省からの補助金、日本企業からの支援で運営を維持していく。1980年代には土地の一部や貴重書の売却などの事態にもなった。2009年に国会図書館支部の契約終了。2011年に三菱グループの支援で建物の全面建て替えを実施。建物は地下1階、地上7階。1階から3階まで一般の人が入ることができる。その他はほとんど書庫で、7階は研究室となっている。

2013年に公益財団法人となり、現在に至る。

2 どんな活動を—

東洋文庫の活動は4つの柱がある。一つは図書、次に研究、そして普及。そしてそれを支える総務がある。私たちが利用できるのは、1番目の図書部門と3番目の普及つまりミュージアム関連の部

門だろう。

まず一番興味のある図書部門（ライブラリ）から、どんなところか紹介しよう。

3 ライブラリ

入口から右手の自動ドアを抜け、正面のエレベーターかその右手の階段で3階に上るとその右手にライブラリのドアがある。その前に左手のロッカースペースでカバン類は預けなくてはならない（100円用意しよう。使用後は返却される）。さて、重たいドアを開

けると、左手にカウンターがある。その前に利用するには—《図書館は閲覧のみです》

HPをご覧になれば、利用方法、時間、複写サービス等詳しく掲載されていますが、とにかく身分証明書（免許証その他本人確認できるもの）を忘れないように！これは大事です。

さて、このライブラリの蔵書は、漢籍をはじめ、アジア諸地域の文献（チベット語、タイ語、アラビア語、ペルシア語、トルコ語等々）、洋書、和書と大きく3つに分けられ、合わせて約100万冊所蔵している。アジア全域を網羅する収集は世界的に例がなく、東洋学研究のための貴重書コレクションである。この中には、初めに紹介した岩崎文庫やモリソン文庫の他、国宝5点、重要文化財7点も含まれている。貴重書でも事前に予約をすれば閲覧可能なものもあるのが素晴らしい。（どんな資料が閲覧できるか等、HPの「貴重書の閲覧方法」を確認してください。）



上：外観／下：モリソン文庫



図書館員にとってうれしいことはレファレンス・サービスにも対応してくれることだ。

東洋文庫にお世話になるほどのレファレンスがくることは、市町村図書館では中々ないかもしれないが、覚えておくとよいかもしれない。複写サービスも制限はあるにしても対応してくれる。HPから蔵書検索もできるので、一度見てみてほしい。

4 ミュージアム

新館になって充実した部門である。入口右手の自動ドアを入り、左手に展開されている。

今回伺った時は、移民150周年（明治維新と同じ！）を記念して「ハワイと南の島々」の展示が行われていた（5月27日まで）。1階ではハワイをはじめ南の島々の資料や、移民の方達の当時のパスポート等も展示されていた。2階に上がると、モリソン文庫をはじめ、ガラスケースに貴重文献の展示、そしてハワイ等の資料が展示されていた。入場料は一般900円（その他様々な設定がある）である。

モリソン文庫の展示は圧巻で、ミラノのアンプロジアーナ図書館のような重層的な書架がコの字型に並び、間あいのガラスケースに貴重書の美しいページを見られるようになっている。もちろん手を触れることはできないが、ここにこの蔵書があるということの豊かさが迫ってくる。次の展示ケースには、国宝史記から「夏本紀」や「18世紀のコーラン」などなど、貴重書が目の前で見ることができる。次のスペースには、ハワイをはじめ南の島々の貴重な資料が展示されていて、ゆっくりじっくり見ることができる。

1階にはミュージアムショップ「マルコ・ポーロ」もあり、様々なグッズを販売している。次回の展示は6月6日から9月5日まで。テーマは「悪人か、ヒーローか」である。

5 アカデミア

研究部門関連として東洋文庫アカデミアも紹介しよう。これは東洋文庫が誇る貴重な蔵書・コレ

クションや研究成果を、より多くの人に発信する市民講座である。教養講



上：「国宝 史記・夏本紀」
下：「コーラン 18世紀」

座、語学講座、体験・ものづくり講座に分かれ、今期は17講座行われている。興味のある方は「東洋文庫アカデミア」を検索してみてください。

6 雑感

久しぶりに訪ねて、昔と大きく様変わり、とても入りやすくなっている。思ったより敷居は高くありません。図書館の開架スペースは参考図書（目録・地図・辞典・年表等）が置かれていて職員を通さなくても閲覧できる。

部屋の窓からモリソン文庫が見下ろせるが、これも壮観（見せてくださってありがとう）。知識の宝庫である東洋文庫。こういった施設が日本にあるという幸せを感じる日だった。

敷地内のレストラン「オリエント・カフェ」もご利用あれ。小岩井農場が経営し、中庭が見渡せるおいしいレストランである。

皆さんも機会があったら、ぜひ一度訪ねてみてほしい。背筋が伸びます。（かんばら かずこ）

《図書館の簡単な利用案内》

開館時間：9:30～16:30

資料請求：9:30～11:50, 13:00～16:00

休館日：日曜日、国民の祝日、毎週火曜日、

年末年始

所在地：〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-28-1

電話：03-3942-0122（図書部）

03-3942-0280（ミュージアム）

URL：<http://www.toyo-bunko.or.jp/>

*ミュージアムは利用時間・休館日等図書館と異なるので、ホームページを確認してから、訪ねてください。

本から発せられるもの

—タラブックスの本との出会い—

溝上 牧子

何年か前、私は板橋区立美術館内にあるショップで、タラブックスの“The Night Life of Trees”という本に出会った。見た瞬間、本にクギ付けになった。手にとってその感触を楽しんだあと、値段をみると、輸入のその本はとて高く、当時8000円くらい(?)したのではなかったかと思う。何度も手を出したりひっこめたりを繰り返したあげく後悔したくなくて買ってしまった。大判のその本は、何より手触りもいいし、美しく、心が満たされた。この本はシルクスクリーンのハンドメイド。そのことを知ってハンドメイドで本を作って販売する場所が個人単位ではなく会社として存在することにとて驚いたのを覚えている。今の日本で、商業的に、それも機械で印刷された本の流通しか想像したことがなかった私にとって、この出版社の本作りは衝撃だった。

そして、タラブックスの展覧会が開催されるのを知ってからワクワクしていた。日本である“The Night Life of Trees”を作った本の出版社の展示を見られるとは！ひとつの出版社が出す本が評価され、海を越えた他国で人を呼ぶような展示になる。それ自体すごいことだ。その本を通してしか知らなかった、そのたった1冊の本から発せられるものの正体はどこにあるのか？

展示が始まり、私は展覧会とシンポジウムに足を運んだ。タラブックスの本の作り方はとても自由で形もさまざまだ。一方で日本もインドも、タラブックスも私たちが出版社としての仕事に沢山の共通点もあり、全てが特別ということでもないということもわかり嬉しくなる。

この時来日したタラブックスのふたりのギータさん。彼女たちの口からは等身大のことで悩む、ごく普通の真面目な経営者の姿が浮かびあがる。タラブックスの本はシルクスクリーンで刷られた手製本のハンドメイドの本が一つの大きな特長ではあるけれど、同時にオフセット印刷の本も作っている。それらのいくつかは昔話や伝承を基本軸に置き、それ

を描く幅広い層の無名な画家を見出し、その価値を具現化してゆく。仕事をするにあたりタラブックスのギータさんが大切にしていることのひとつは、働く人たちの生活を守ること。犠牲によってなりたつ会社はあるかもしれない。けれどそんなことは長続きしない。働きが働きとしての価値を生むようにと心から願っているし、実行している。善良な経営者の姿だ。そして常にお金をどのように使うか、どのように収入を得るか、に頭を悩ませていると言っていた。本の値段は働く人、そして読者のことも考えてつける。高すぎたら人には届かないし、安すぎれば従業員にちゃんと生活に見合う給料を払えない。

オフセット印刷は大量に作ると1回当たりの手間が減る分1冊当たりの単価が安く済むが、ハンドメイドはほとんどが紙代と人件費。コストが下がる余地がほとんどないと言ってよい。だから海外で同じ方法で作ってくれと言われたら値切られても値切らないと言っていた。いや値切れないのだ。世界中で沢山本が売れたとて利益がそんなに大きいわけでもなく、お金は無尽蔵にあるわけでもない。今あるお金の中から、たまには品切れになっている本も重版したい、新しい本も作りたい。いっぺんには無理だと判断すれば先に何を優先するか判断する。

経営を成り立たせるために工夫も怠らない。彼らは収入源のひとつとして、ハンドメイドで出た本のレベルに達しなかったプリントでグッズを作成したり、あまり手間をかけずに作れるハンドメイドの紙製品なども作り販売している。創意工夫により会社をなりたせ、海外でも高く評価され、実績も作っているのだから大したものである。

真面目にコツコツと価値のあるものを生み出すことの意味を、他者が正当に評価しているという事実にとほとする。スピードや安さが求められるだけの世の中でもあるが、丁寧に仕事をしたいと思える原点がそこにはある気がする。まっすぐに、人から人へ手渡すように。

(みぞかみ まきこ:朔北社)

鎌倉散歩～ゆかりの文学を訪ねて

山口 由美

通勤というほどではないが仕事で、鎌倉にはよく行く。駅に降り立つと、いつでも狭いホームにはいっぱいの人である。自然の美しい春は春で、紫陽花の季節は言わずもがな、そして、遠足や修学旅行シーズンの秋も、冬でさえも、一年中、鎌倉には絶えることなく大勢の観光客がやってきて賑わう。

人々を魅了し続ける古都鎌倉は、名所旧跡も多く歴史的に興味深い場所であるが、文学にとっても、昔もいまも魅力的な街のようだ。川端康成、小林秀雄、井上ひさし、中原中也などなど、たくさんの方の文豪、文化人が住まい、そして、数々の名作の舞台になっていることは、御存じのことと思う（最近では、「シン・ゴジラ」も出没したということです）。そんな鎌倉を文学散歩するだけで、本が一冊完成してしまうので、今回は駅の周辺に限り、ご紹介したい。

電車を降りると、まず目に飛び込んでくるクラシックな佇まいの「ホテルニューカマクラ」。このホテルは、芥川龍之介と岡本かの子が運命的な出会いをした場所であったとか（当時は、「平野屋」という料亭で避暑の客を泊めていた）。岡本かの子『鶴は病みき』（信正社／1936年）に登場する「麻川壯之介」は、芥川がモデルであると言われており、瀬戸内晴美『かの子繚乱』（講談社／1974年）にも、ここでの二人の出会いが書かれている。線路沿いのこのホテルの並びには、小川糸『ツバキ文具店』（幻冬舎／2016年）に実名で出てくる小さな食堂もある。TVドラマにもなったので、ご存じの方も多いのでは。この小説は、表向きは文具屋だが、実は代書屋を営んでいるという女性が主人公。彼女が、依頼の手紙を通して出会う人間関係と鎌倉ならではのあたたかな近所付き合いを描いた日常の物語である。本の中の鎌倉は、店の名前も場所もリアルな鎌倉なので、知っているのと光や匂いまでもが蘇ってくるかと思う。読了後に訪ねてみるというのも、楽しい。

駅からの商店街「小町通り」の入り口には、川端康成が通った「イワタコーヒー」がある。古い茶房だが、現在は、厚く焼いたホットケーキが人気で再び脚光を浴びているらしい。この店は、日本画家、鏑木清方のお気に入りでもあったという。清方は、随筆においても定評があり、『こしかたの記』（中公文庫／2008年）『続こしかたの記』（中央公論美術出版／1967年）には、明治後期から昭和にかけての風俗や文化人たちの暮らしが、当時の空気感とともに生き活きと描出され、味わい深い。清方住居跡は、小町通りの少し先。現在では、鏑木清方記念美術館となっており、清方の逸品をいつでも鑑賞することができる。

近くには、大佛次郎邸もある。大佛といえば、ヒーロー「鞍馬天狗」の作者として有名だが、少年向け時代小説『ゆうれい船』（徳間書店／1956年）も老若男女が心惹かれる物語だ。大佛次郎は、文人の中では、早くから鎌倉に住み始めたのだそう。鎌倉を愛し、開発を憂いた大佛は、「鎌倉風致保存会」を組織して鎌倉の自然と景観を守る活動をしていた。現在でも残る瑞々しく豊かな美しい鎌倉の景色に、文士が一役買っているというのも興味深い話だと思う。

最後に、詩人中原中也が暮らした寿福寺に行ってみよう。中原は、30歳という若さで夭折したとき、この寺の境内に家を借りていた。近くに居住していた小林秀雄が、この頃の中原を『作家の顔』（新潮文庫／1961年）に「中原中也の思い出」として回想している。

そして、寿福寺といえば、北条政子と源実朝の墓所であるが、大佛次郎や高濱虚子の墓も。このあたりには、切通しもあり、鎌倉らしさがある。切通しの周りは夏でもひんやりとして、薄暗いトンネルの向こうには違う世界が広がっているかのようだ。鎌倉と文学との相性の良さは、こんな神秘的な風景にあるのかもしれない。

（やまぐち ゆみ:アートとつながる鎌倉）

選書の法則：

S. R. ランガタンからの187のメッセージ (13)

吉植 庄栄

13. 勤続 20 年

しばらく『図書館選書論第2版』の話をしたので、箸休めに勤続 20 年の話をする。

国立大学の図書館員になったのは今から 20 年前、就職氷河期の前半であった。母校の図書館に勤務し、学生時代の延長戦を行うこと、可能な限り楽で体に負担をかけない仕事、そして文化の香りを近くで感じることができる仕事に携わりたいと考えた。国家公務員 II 種試験図書館学区分、今の大学法人等職員採用試験であるが、これを受験すること 4 回目、やっと合格した。悲願の合格を果たしたのち、母校の図書館はその年採用を行わないことを、当時の総務課長から聞いた。最初冗談かと思ったが、その話は本当であった。

仕方が無いので、可能な限り近隣で図書館員を募集している大学を探し、幾多の面接を経た上で、東京外国語大学附属図書館に採用が決まった。当時東京外国語大学という大学は、入試制度の関係で大変難関な大学であった。そのため縁が無い大学と思っていたが、まさかそこで社会人 1 年目を迎えるとは考えてもみなかった。

採用初日の午後、担当業務の説明を受けた。外国語大学の図書館であるので、世界の様々な言語の図書を所蔵している。その様々な外国語の図書の目録を取ることが、仕事であった。新人 1 年目は、英語で許してやるが、翌年からは世界に羽ばたいてもらう、という説明であった。そこまで深く考えていなかった自分を、非常に反省した。

予告通り翌年からはベトナム語を皮切りに、中国・韓国を除く、アジア全域を担当することになった。この時学んだのは、アルファベットで書かれている外国語はまだかわいい、ということである。アラビア文字、タイ文字、ミャンマー文字・・・そしてインド諸語、自分には模様にしか見えない図書の目録を取った。中途、北区西ヶ原から府中市朝日町への移転にも携わったが、その疲労もあってか、その 3 年間に 2 回入院した。

4 年目からは、母校の図書館に配置転換してもらうことが叶った。新しい赴任地は理系の図書館で、「文字が読めて、意味が分かる」英語の本ばかりを所蔵していた。そこを皮切りに、広い母校のキャンパスの中にある大小さまざまな図書館・分館・図書室を 3 年ごとに異動した。

この間、自分の経験とアイデアが大いに活かせる部署もあり、仕事は本当に楽しかった。また、宮城教育大学という近隣の教員養成大学の図書館にも 3 年間出向した。ここでの担当は庶務会計であったが、司書教諭科目の非常勤講師発令を受けて授業を担当し、大変いい経験と思いが残った。

幸いにも現職の参考調査係長は、出身学部に近い「自分の経験とアイデアが大いに活かせる部署」の 2 回目である。おまけに今度は係長であるから自分が引っ張って行くことができる。この仕事は心から楽しかった。上官や部下に本当に恵まれて、様々な企画を実行し、旧弊を吹き払った。

さて、どの職場も 3 年目が来ると、不安になる。3 年という任期を完了すると、理由は不明な異動を命ぜられるからである。昨年夏の長い雨のころ、この係の担当もいよいよ終わりが来るのだろう、ということが段々現実感を伴い迫ってきた。40 も半ばになり、“人に行先を決められる人生”は耐えられなくなっていた。若い頃はこれも勉強だと思ったが、この年になりいつまで勉強しているのだ、と思う。最高に楽しい担当の次は、きっと燃え尽きるに違いない。その時、自分の人生は果たしてそれを目指していたのだろうか、と自問自答して後悔するに違いない。東日本大震災で、自分の自由になる時間のありがたさを噛みしめたあの経験は何であったのだろうか。

そのほか、色々な思いや悩みが背景にあるものの、体重 8 kg が急激に減少した結果選んだ結論は、“勤続 20 年をもってこの生活に終止符を打つ”であった。

人生の正午が過ぎ、豊かな午後であって欲しいと切に願う。(よしうえ しょうえい:盛岡大学文学部)